

## 2017年度 須磨学園中学校 入学試験問題 第2回

### 国語 出題意図

#### 全体について

2017年度の問題作成にあたり、須磨学園のスローガンである「to be myself,...」に基づき、従来の方針や様式を継承しつつ、受験者の学力を検出できるよう配慮した。

また、「知識を中心とした漏れのない基礎力」に基づき、「内容・表現・心情について深く思考し表現できる応用力」をどれだけバランス良く兼備しているのかを判定できる試験問題を目指した。

以下は、問題作成担当として、留意した点である。

- (1) 問題は、昨年同様に3問構成とし、「小問集合」「説明文」「小説文」の配列とし、150点の配点、60分の問題とした。
- (2) 出題範囲と問題構成は、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な力が反映されるよう配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように構成し、各設問の難易度のバランスを考え、識別力のある問題となるよう留意した。
- (3) 問題文や設問及び選択肢の吟味には、上記の学力を問うものなるよう細心の注意を払うとともに、リード文や注は受験者の理解の一助となるよう工夫した。

#### 各問題について



問一 「調べる」という勉強における基本的習慣が身についているかどうかを試す問題である。

問二 一見すれば語句の意味を問う知識問題だが、単なる知識の確認に留まらず、その言葉の持つ語感を適切に把握しているかどうかを試す問題である。

問三 自己表現において、最も本質的な心情語の知識を確認する問題である。具体的な状況に対応する語を選ばせるという問い方の工夫を施すことで、知識の活用力を問うている。

問四 漢字の持つ意味の広がりをもとに、どれだけ理解しているかについて確認する問題。間接的には、普段から漢和辞典に親しんでいるかどうかを試している。

問五 敬語の理解を問うた問題。敬語を用いた例文の正否を考えさせることで、習得知識を適切に運用できているかどうかを試している。

問六 句読点を付ける問題。文の意味の切れ目を適切に把握できているかどうかを試し、間接的には読解力の有無を問うている。

□ 昭和 10 年に執筆された、地震によって大きな被害を受けていた当時の住宅問題の原因・対策に言及した文章である。過失を人間につきものだとし、過失を招いた責任者を咎めるのではなく、再発防止を目的とした具体的な対策を講じることが肝要だとする主張は、昨今の社会問題に対する世間の対応を思い出す限り、まったくその意義は失われていないと言えよう。素材文は硬質な品位ある文体で、受験生にはやや難解な語を含むため、読解しやすいよう語注を多く施した。

出典 寺田寅彦「災難雑考」（『寺田寅彦セレクション2』所収）

問一 漢字の書き取り問題。比較的書き取りしやすい漢字でも、普段見慣れない話の流れで問うことによって、受験生の読解力・文脈力を間接的に問うている。

問二 カッコにあてはまる接続詞を選択する問題。話の前後関係を適切に把握する論理的思考を確認している。

問三 空欄前後の文脈を踏まえつつ、選択肢の語句の語感を適切に把握した上で、ふさわしい語を選ぶ問題。受験生の語彙力を試すと同時に文脈力を問うている。

問四 本文冒頭の、地震の起こった当時の台湾の状況が適切に把握できているかどうかを確認している。指示内容を明確にするという設問要求の明確な問題とすることで、受験生の心理的負担の軽減し、内容理解を円滑にするための導入問題である。

問五 傍線部までの内容を整理した上で、「自然の勢い」という傍線部の表現を適切に言い換える問題。冒頭部の導入問題、結論部の問題に加え、本文中盤において問題を作成する場合、比喻などの表現の面白みや、論理構造を要約した表現に着目する機会が多いが、ここでは前者を出題の意図とした。

問六 本文中盤の内容を理解する問題。問題自体の難易度よりも、問題を通して受験生の本文理解を整理し、本文後半の内容理解を円滑に進めるための問題である。

問七 台湾の土角造りの住宅問題や、日本の箱根の吊橋問題に共通する対応策について述べた後半部の主旨理解を問うた。比較表現や強調表現、傍線部直前の文脈を手がかりに、安易に選択肢に頼るのではなく、受験者自身でその内容が把握できているかどうかを試しており、問九に理解をつなげるための誘導問題でもある。

問八 文脈を手がかりにしながら、傍線部内の比喻表現を適切に把握する問題。言葉を額面通りに理解するのではなく、その表現が意味する内容を的確に理解できているかどうかを確認する問題である。

問九 結論部の内容理解に関わる問題。災難を防ぐための対策を、論旨に従って的確にまとめる要約力に加え、100字以上の記述量を課すことで、受験生の答案構成力や表現力を併せて問うている。指示語を含む一文に傍線部を引くことで受験生の取り組み易さを考慮し、内容理解を補助するため注を施した。

㊦ 世界がグローバル化する一方、歴史・宗教・文化の違いを原因とする事件が幾度となく報道される昨今、他者理解、他者との共存という課題は、ますますその重要性を増している。国際理解教育を推進する本校においても、異文化理解の土台である他者理解は最重要テーマである。上記の問題意識に基づき、家族の一員だが、幼い筆者にとっては理解の及ばない他者として描かれる「祖父」が登場する本文を、他者理解に対する受験生の志向性を判断する最適の素材文と判断し、出題した。

出典 青木玉『小石川の家』

問一 慣用句の知識を問うた問題。言葉と意味との一対一の理解ではなく、その慣用句を用いた適切な例文を選ばせるという問い方の工夫を施すことで、知識を適切に活用できているかどうかを試している。

問二 空欄を補充する問題。選択肢の言葉の持つ語感の把握と、空欄前後の文脈が適切に把握できているかという論理的思考を問うている。

問三 「祖父」が医者を嫌う理由について、本文冒頭の内容理解を踏まえて解答する問題。問題を通じて、内容理解の鍵となる「祖父」の人物像の輪郭を把握し、以降の作品世界を円滑に読み進めてゆくための導入として、この問題を設定した。

問四 「祖父」の機嫌を窺う「母」の様子を、傍線部の表現を手がかりに把握する問題。該当箇所は、慣用句や古風な言い回しが用いられた箇所であり、前後の文脈から、適切に内容を把握することができているかどうかを確認している。

問五 筆者の返答を受けた「祖父」の反応について、短い言葉に込められた意味の広がり理解する問題。傍線部自体は短いものの、論理構造が凝縮されているので、前後の話の流れを参照し、内容を慎重に把握する読解力を試している。

問六 「祖父」の発言意図を推測する問題。傍線部の「祖父」の発言を額面通り理解するのではなく、傍線部の後の内容と関連させながら、発言の意図にまで掘り下げて理解することができているかどうかを確認している。

問七 近い距離にある、同じ「泣く」表現でありながら、微妙に異なる表現に着目して問題を作成した。「ぼとぼと」「びそびそ」という畳語の語感を適切に把握する言葉に対する鋭敏さや、80字で心情を表現する表現力・答案構成力を問うている。

問八 物語を読解する上で重要な人物像の把握に関して、最初から順を追って直線的に読んでいるだけでは見えてこないような、少し違った角度からアプローチする小説の楽しみ方を紹介する意味合いもあって、この問題を設定した。